

中村俊定文庫  
文庫 18  
771



Letter from ...

2/10 ...

Apr 11

...

...

此書表書題箋内題もあし此書の文添  
文鮮等註あり註諧冬日註と  
ある所を註し註諧の瓢猿蓑註と題す  
此字本を註す註諧者吳り又註の字は天保六年と  
あり此書は文化十一年に註す  
註諧瓢猿蓑註  
人の著  
と思ふ

水谷を以て記





本書は  
**巳乃や四ノ**  
 藏書を  
 軍奉行  
 文化主  
 甲戌五月  
 下旬  
 字之  
 巻末



朱書目入水口

水口

おのちの  
 著り  
 汁の  
 の益

花  
 可  
 極

共一  
 本  
 又

翁

四の目  
 風  
 文  
 評

春  
 有  
 前  
 長  
 途  
 旅

西日  
 旅  
 共一  
 本  
 又

前  
 長  
 途  
 旅

○月待  
定老  
八月十六  
八月十六  
八月十六

○積島とて  
和註大節集  
よしが田園の地

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

み  
ひ  
ひ

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

み  
ひ  
ひ  
ひ

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

秋の歌  
註に  
迷かき

定老の月待の...  
木下...  
三三三  
大集  
水

家見い其人の  
執事のみまり  
立身うろあ体

物ありのふり物ありのふり物ありのふり  
箱

家見い其人の  
用える親のふり物ありのふり物ありのふり  
頑

評曰所強世情也然其人也家子ありて世情人情の差か  
と知し

秋風の形にはあつた  
水

次を前の方を  
友の共陽あり  
足て付るを親

厚ゆくあつた  
白子みね  
箱

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

一毎日に  
神のたかこ  
4部よか  
死の身の一  
頑

家見い其人の  
死の身の一  
水

死の身の一  
死の身の一  
死の身の一  
死の身の一  
死の身の一

何より  
水

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

○止登事解

○七都道

○前都道

○巨舟の文

○二舟

○秋の山

○今評註

其意ある方は羅子のやとて思ふる  
自他の差別を認むる  
○妻水は其人の才也  
七都道の城

○純地  
純地見るといふは  
はあひやう翁

○東より  
記の同字が誤り  
○碩

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○酒の元なる  
酒の元なる

○水

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○伊の国  
伊の国をいふは  
伊の国の国をいふは

○押

○押

○頭とちた

耳木とて月  
と毎年の碑

○史書十三卷には  
貞往の油日記

○此の文は附会小説

○此の文は附会小説  
○此の文は附会小説  
○此の文は附会小説

怪にしてしめ頭の子をり 碩

いささか頭の子をり  
へて世の行はれり  
さよと評曰おこし  
其るを世の行はれり  
を初めんは物言に際めり  
の句とて

月あ 高殿 木

明成徳とて見ても  
前白の人性徳のたれ先世と改てあると云ふし 朝白

貞徳の袖日記の進高木の方とてありて先代  
立他者のおのれ斗のち福をせん 藤原木とて引のゆく 城際  
近くせのよせりかく名人の 変りけり 考ハ自他分明にして  
一巻の運びと見えし

花さく 木

近く世の色 只四方なる 水

此一人の草の香りして台作まを思惟也

か、いりる 源者境界の安き心と見えし 水

前白人の天衣を 醫者者のく 水

ある醫學者の業 漢花は 水



其人の階下  
コトありし  
とて

蛇子かきし

吹

其二

色の名もこりこれとて

くみれとてのしあふとて

論の長閑さつとて

論の長閑さつとて

打撃も異なり  
山阿弥も  
つとて  
卵の卵

論の長閑さつとて

(本)

蛇の角は蛇

蛇の角は蛇

親子並日お

蛇の色は蛇

の月記  
民家と  
は非  
とて

蛇の色は蛇

室のいぢり  
ほろひさし  
そし其人の 妙をとこそさう  
働者様と  
合

室のいぢり  
妙のたはし  
人と研丸人と 軒一途  
合  
隙

室のいぢり  
のいと  
は味花  
小六ろたひ  
合  
珍

室のいぢり  
人の水  
先色之丸  
鮎  
合  
珍

室のいぢり  
社  
先色之丸  
合  
珍

室のいぢり  
年  
合  
珍

室のいぢり  
左  
合  
珍

室のいぢり  
左  
合  
珍

室のいぢり  
左  
合  
珍

室のいぢり  
左  
合  
珍

○学識のあま  
人のみと云  
お噂存じ  
故に二方一解  
と云ふか  
室より並マ物

安らぎの秋を  
愛する言はれ  
し二方一解と  
云ふか  
花の赤いよ月は  
陽気  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

室より並マ物  
と云ふか  
室より並マ物  
と云ふか

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

安らぎの秋を  
言はれより志を  
て其のいのおも  
のさむ様子の  
下(上)と云  
珍石

遠く其の里はつれの家の  
の物とし其妻もいづれに對して  
なり

遠く其の里はつれの家の  
の物とし其妻もいづれに對して  
なり

遠く其の里はつれの家の  
の物とし其妻もいづれに對して  
なり

記明とてい  
ありては  
記明とてい

文の初めは  
記明とてい

記明とてい

記明とてい

記明とてい

記明とてい



言まじい前かを  
経衣の指をえい  
其人の指衣多と西羽  
志まじりよ  
備かるは林と  
言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見

言まじい前かを  
経衣の指をえい  
其人の指衣多と西羽  
志まじりよ  
備かるは林と

言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見

言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見

其三

言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見

言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見

言まじい花  
房の押か  
何と見  
言まじい花  
房の押か  
何と見



山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影

山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影

山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影

山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影

山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影  
 山石の竹葉の  
 出づるの影

安んずるにあらざる  
備ふるにあらざる  
一物一なり

中らるる事なればと出た

陸原

安んずるにあらざる  
一と見ざる事なれば  
の付し

天のふり居る事なればと出た

乙海

安んずるにあらざる  
口論するにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

乙海

安んずるにあらざる  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

乙海

安んずるにあらざる  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

乙海

安んずるにあらざる  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

乙海

日向座

安んずるにあらざる  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

陸原

安んずるにあらざる  
日向座  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

陸原

安んずるにあらざる  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

陸原

日向座  
安んずるにあらざる  
の附する事なれば

安んずるにあらざる  
日向座  
の附する事なれば

安んずるにあらざる事なればと出た

陸原



雲の心もあつた  
舞臺に付て木  
欄剛と拍響は中を胡をめて  
泥土

前より他一  
名の時月から作らるる  
夕の月と葉の吹出  
名紙

空をいふの字を  
付てし者  
骨の咳をまきし映え  
里東

四十は老の年を  
初老の人の心  
瑛碩

其の心は  
野上柳子林の  
乙女

空をいふの字を  
付てし者  
醉を  
形

空をいふの字を  
付てし者  
花を  
名紙

空をいふの字を  
付てし者  
田の  
名紙

空をいふの字を  
付てし者  
其の  
名紙

空をいふの字を  
付てし者  
象の甲  
名紙



同好

十一

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

地経

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

家より：主人の  
位への信家あり  
新白と之年  
一物してはしり  
新白の作の曲家と云ふ  
及月

十一

書きし其人の  
名を掛かり月  
の書甲とせん  
ゆゑに白の  
其のくろきを  
の付と云し  
後入の中者  
かくその甲  
ゆゑに白の  
其のくろきを  
の付と云し

其のくろきを  
の付と云し  
すくとおも  
母と云ふ  
其のくろきを  
の付と云し

其のくろきを  
の付と云し  
すくとおも  
母と云ふ  
其のくろきを  
の付と云し

其のくろきを  
の付と云し  
すくとおも  
母と云ふ  
其のくろきを  
の付と云し

○文政元年  
道彦の虚子  
鉢と云ふ  
この是は  
前に云ふ  
前に云ふ  
前に云ふ

鉢と云ふ  
この是は  
前に云ふ  
前に云ふ  
前に云ふ

果実

探志

○七部  
其のくろきを  
の付と云し  
すくとおも  
母と云ふ  
其のくろきを  
の付と云し

其のくろきを  
の付と云し  
すくとおも  
母と云ふ  
其のくろきを  
の付と云し

実事求是の精神  
ありて起るべき  
て有るは往來の  
切に事行記  
人々の精神を  
實事求是の毛  
又その中に  
改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を

自らの甘き  
しきりたる  
自らの甘き

改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を

改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を  
改めざるを  
見ても他を

煤が思に  
あつた

目とめり  
目とめり  
目とめり  
目とめり  
目とめり  
目とめり  
目とめり  
目とめり

老病の人と  
昔人の付  
老病の人と  
昔人の付  
老病の人と  
昔人の付  
老病の人と  
昔人の付



登る不討て  
其多しの先  
色打活と云

明れはほむ神意の能

珍碩

才三南太の太  
傳のうじ大と首  
大といふわら居  
粉と云 評白

南太のせやくとゆふ 幸の空

全

室まふ行用か  
こもりを世をか  
のくはるき

撫へお 物 事 是の  
あ字 玉秀

玉秀

州之共一人と  
見るしては  
わ作のあしらむに云し構へおのりやと云 評と外はれ久  
の家 軍 掛 人 衆 所 二 三 の 志 伴 一 正 久

日新又新之つおの軍勢

全

一

の頭を菊のつらとて

(まは徳物)

草の二やうこく  
すしとて

草と黄はるま

珍碩

如くは  
つらとて  
草の二やうこく  
(まは徳物)

室まふは草の二や  
と外はれ久

中をひら

正秀

明近と云と見  
見まふをせらへ

正

珍碩

其の所  
文と云し  
評と云

折言文と云ふは

正秀

室まふは氏  
先を  
ひと

及

珍碩

付と云し

おこしは氏の  
休として居た  
巻の扱を付し  
正秀

前の他を以て  
けり評曰く  
の如く其の  
意人し  
珍碩

實に前より  
まはるる  
まはるる  
正秀

色色  
珍碩

正秀

封付

珍碩

正秀

全

珍碩

三十一



壽 本堂

寅のそと 寅寅、羊の  
寺院より 解と 火を吹くもの 澤門の徳人  
ありと見る 昔傳をさうし  
はすん 荒壁の中 珍碩  
西門 自王帝の  
中奉り 女帝之  
其法 仲とよせと 古くはと 珍碩  
正秀

の 徳

寅寅のあつ  
人のあつ  
正徳の 足とと 徳とと 徳とと  
あつ 徳とと  
人のあつ  
かせり  
とら  
正秀

本堂のあつ 徳とと 徳とと

あつ 徳とと  
正秀

あつ 徳とと  
正秀

あつ 徳とと  
正秀

田舎にえき  
のるは正の世  
下今細川氏領す西の地をせさるは  
かよりんていんの中よりけを依り。野  
人の舟

珍碩

「まの舟にひんかきこし」  
旅行者の舟に降りてはるる内航の中より

正秀

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

珍碩

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

正秀

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

珍碩

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

珍碩

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

正秀

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

珍碩

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

「まの舟にひんかきこし」  
まの舟にひんかきこし

正秀

江無天正を歴に正の事よか永正は歴に其の事に事成

昔昔南序

此序の事は正の  
以字の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の

此序の事は正の  
以字の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の

此序の事は正の  
以字の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の

此序の事は正の  
以字の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の

此序の事は正の  
以字の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の  
故の事は正の





元々一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中にの人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

一物の中を裁き出し、その中にあるものを取り出す  
 人を一と云ふ。其の字は、その中の人の別を云  
 う。一と云ふ。

評曰は乃卯又  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

有るべき海を流ししを  
以上文字の破り  
評曰は乃卯の字

評曰は乃卯  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

備よす  
評曰は乃卯の字

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

○白氏文庫

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南

評曰は乃卯の字  
其あはれや隆のよれて年月 甚南





はたかたよりうろこたる田舎よはたかたより

評曰新後拾遺集子 合類のありきと油のしるし

七夕の暮のうろこたる田舎よはたかたより  
ねぶたのしるしと油のしるしと  
うろこたる田舎よはたかたより

評曰新後拾遺集子 合類のありきと油のしるし

ねぶたのしるしと油のしるしと  
うろこたる田舎よはたかたより

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと

ねぶたのしるしと油のしるしと



ハカ三断二カ

○三つをぢりみせト

○三つをぢりみせト  
○三つをぢりみせト  
○三つをぢりみせト

凡兆

史邦

芭蕉

青来

○此陽人の関の中は本折  
○あいらと、マイラ  
○御吹こむ同寄たの  
○助世(元禄上、新始)  
○住持(元禄上、新始)  
○明和元年、京都  
○文鳴か猿鉄義  
○下巻に  
○栗栖池と可某柑  
○子の根を極し歎  
○ひたつるをい  
○親化の句をえん

○人位日金録(音世茶)寺に  
○櫻の又こゝ鼓くちりル  
○寂蓮(十題百首)  
○又(不共)

○古事年(見)住也子(上)め(之)三(一)けり

地教に位るや、のれ家あり、開何柳、葉の葉を折  
ちらなる、い、さ、い、住人のあや、こ、こ、と、ま、い、の、心、さ、し、の  
程中、う、く、あ、げ、の、能、見、あ、る、の、相、子、あ、の、板、も  
瓦、け、あ、の、と、集、田、り、と、き、り、く、ほ、と、結、ひ、な、り、是、を、見  
て、少、し、あ、さ、あ、る、の、昔、の、せ、り、れ、な、り、小、人、同、居、而、方  
不、善、と、い、ふ、一、世、人、の、あ、ら、い、な、せ、き、理、論、し、又、柑、子、の  
本、と、和、歌、子、を、結、し、の、る、の、こ、の、細、作、と、り、い、い、し、

史邦

凡兆

青来

伏見(著)者(不)好(い)住(子)年(四)  
足袋(の)後(行)に(し)事(を)成(す)  
○元江(婦)子(名)月(也)

○元江(婦)子(名)月(也)  
○元江(婦)子(名)月(也)  
○元江(婦)子(名)月(也)

盗い前も  
大なるおかし  
聖一初て午の目あり

大衆ののれ考と  
大衆と云うは修験  
の行と云うは  
時喰具と午の目と

「聖一又午の目  
むは行を替こし

定まらぬ  
人の物多の  
とんこわの

史邦  
史邦の

史邦の  
史邦の

# 空獲

## 吸物と肥田の相作を又せ

肥田と云ふは  
吸物と云ふは  
肥田と云ふは

史邦  
去末

肥田と云ふは  
吸物と云ふは  
肥田と云ふは

肥田と云ふは  
吸物と云ふは  
肥田と云ふは

肥田と云ふは  
吸物と云ふは  
肥田と云ふは

史邦  
凡兆



定まらぬ心  
思ひつらぬ心  
とらぬ心  
ふさ人と相殺候なりとせし  
甚

實は此の心  
高と出書  
今や此の刀さし  
素

富の人の心  
世の中を神と云ふ  
其の心  
凡

富の人の心  
世の中を神と云ふ  
其の心  
史邦

○古集并  
と集集に  
妻に名に  
増の心  
トヤリ  
と二の心  
まづ

今や此の心  
世の中を神と云ふ  
其の心  
史邦

我門下は  
獅子門

二一解の心  
見陰陽の心  
以て二の心  
後二の心  
の心

去来

光

○天月  
水流  
客散  
山空  
碧  
李白謝靈運

○帝因  
前自  
光色  
作の  
切水の  
比良  
卯  
月  
室  
月

○田の町に前の村に文をさし 孫の(岩)をさし

○信濃のや  
の春のついで  
(貞男をさす)

家見の御れ  
とさかられ  
使人の御さす  
夢をさめられたる  
しるの角のさん  
其の  
布子若ぬの  
凡兆

押合を居ると又まかり枕  
のさるのついで  
のさるのついで  
凡兆

人々のついで  
のさるのついで  
のさるのついで  
凡兆

色とさるの  
二株靴造る  
批題のさる  
凡兆

評目市甲のあり  
月けりさる  
其の中をの  
凡兆

市甲のあり  
評目市甲のあり  
月けりさる

凡兆

夏文十年天中  
夏月は海  
冬月は海





見る 起程の所ゆゑと知ぶし世人花の散る時と

有るべきは花の散る時と作者の御まじりてお伽の及ぶ所  
のありし花の散る時に神念をさし之後の正覚の花  
を聞くべしと有り素し又此花を散る世の世をさ  
しりて世の中を空しく道心御田の人成るし

凡此

但集抄巻二  
終を因いふやつ  
つ師の荒磯の  
洞に松島が見  
佛上人月ッ十日

所なきは花の散る時と  
素あり若松島隈の松見佛上人月ッ十日  
にをさ道心なるを御ししなる西上人  
之所より西行を遇ひて所なきは花の散る時と  
花の散る時と

花の散る時と

元禄七、  
別序ありありなる巻、  
注うきも佳持二たぬ破き、  
子冊、  
とらへて花の散る時と

○老待人の用と

用とありしは花の散る時と

逆で

也こと屋  
新しき

大漁船を  
とられしあり

芭蕉

○源、も積花  
出門の快

待入りし門の境

毛未

女共の扇風をさのりたる舞を  
おこし居る

凡此

まろげ

家生は花の散る時と  
まろげ

芭蕉

芭蕉定と吟るよりありし  
返るありし

芭蕉

三七

宿金山寺 微茫  
水田分 曾 歸 夜  
船月 龍 出 曉  
雲 西 去

張 結 金山寺  
三 昧 詩  
麦水曰 夜船月との  
白 忍 心

麦水  
遊 遊 遊 遊  
遊 遊 遊 遊

夕秋の地子に  
ささくけい  
地子と云ふなり

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

張 結 金山寺  
三 昧 詩  
麦水曰 夜船月との  
白 忍 心

麦水  
遊 遊 遊 遊  
遊 遊 遊 遊

夕秋の地子に  
ささくけい  
地子と云ふなり

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

張 結 金山寺  
三 昧 詩  
麦水曰 夜船月との  
白 忍 心

麦水  
遊 遊 遊 遊  
遊 遊 遊 遊

夕秋の地子に  
ささくけい  
地子と云ふなり

見兆

直

比兆

比兆

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直

宿金山寺 微茫  
山崎 龍 出 曉  
夕秋の地子に  
ささくけい

直



雑談集

世の事は皆空と云ふに此は世の事を言ふ  
 少物と云ふは昔の作を云ふして今の世の  
 此所書のは世と云ふは

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

去来

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

凡此

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

甚甚

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

○寛永九年  
 ○寛永十年  
 ○寛永十一年  
 ○寛永十二年  
 ○寛永十三年  
 ○寛永十四年  
 ○寛永十五年  
 ○寛永十六年  
 ○寛永十七年  
 ○寛永十八年  
 ○寛永十九年  
 ○寛永二十年

○寛永二十年

○寛永二十年

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

去来

廿三

○寛永二十年

○寛永二十年

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

凡此

世の事  
 何れを辨す  
 親の世の事

去来

三つは、は、其の、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、

〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、

板  
 對付  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、

招請  
 佛  
 馬  
 祈

〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、

〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、  
 〇引益、は、其の、  
 〇お、  
 と、

水

水  
 水  
 水  
 水

水  
 水  
 水  
 水





宮まゝいさかると

海舟の席と 堤が田の青やせりこりせり

見て堤のまの面をばりりせりこりせり

前白青田の 加茂の花をよき社

加茂の花をよき社とていふ

其のまゝ社

物言の屋おのよき社

ちとを愛呼

まゝの金のまゝ

のまゝの金のまゝ

田おとまの曲をよき社

北

其

末

水

五

北

末

の甘菊の細

キに糸

元行地註

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ

まゝの金のまゝ







あるし

けいせいの  
まんの世を

あつた  
れと

山林  
見こ

花の  
ついで

お月夜

お月夜

と

知

花

花

花

たの  
花

あつた  
花

あつた  
花

あつた  
花

あつた  
花

あつた





文化土 甲戌霜月 下旬寫し

水谷三郎



此の小保方里考より人が明治十年より二十五年の間に前記  
文化土甲戌霜月下旬寫す之を以て小保方境考  
併し人の里考を以て佐波郡とありしは佐波郡生郡合  
併して今は佐波郡とありしは佐波郡也

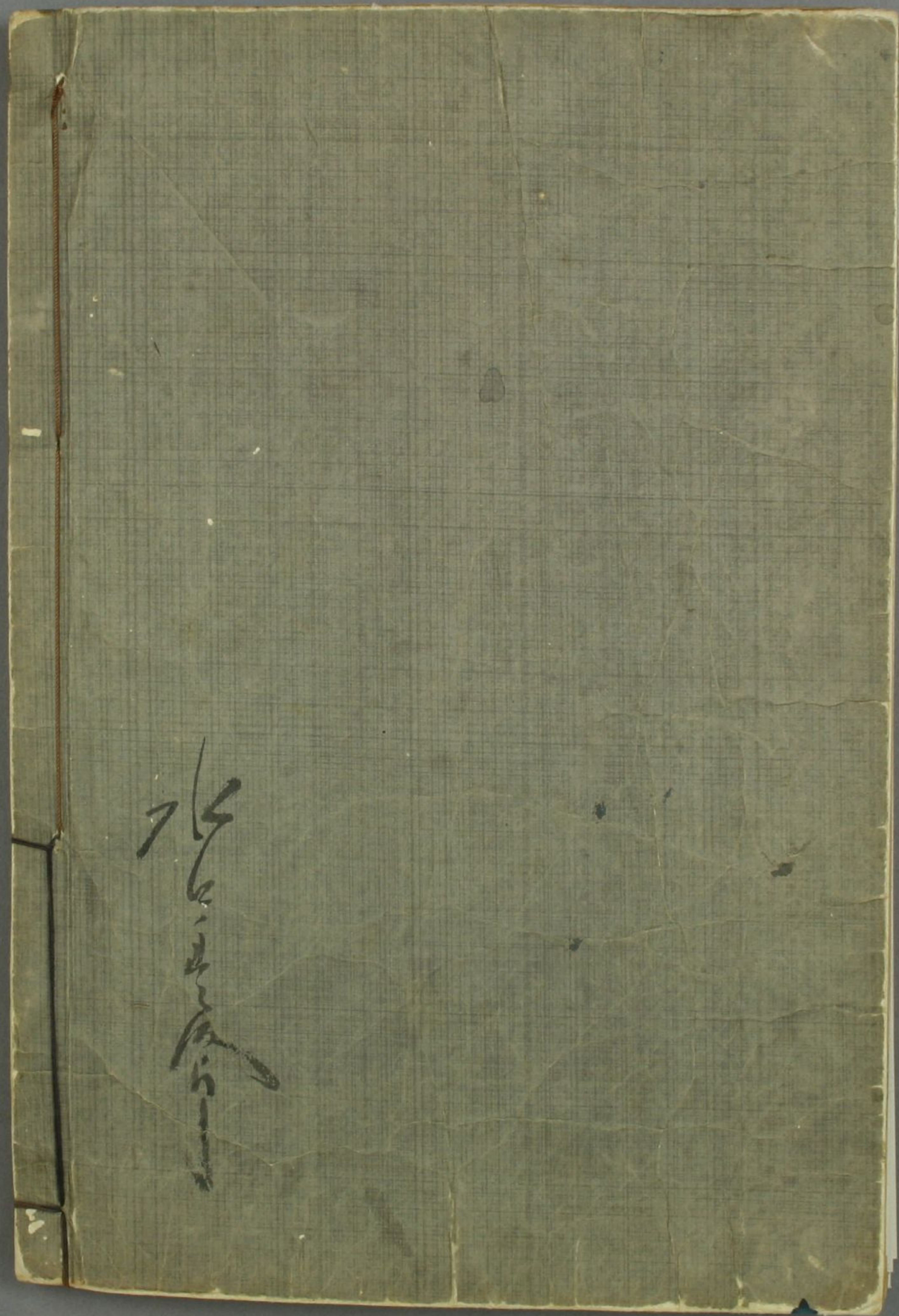
原書の考ありしを述す

群書類

佐波郡

下関名所

小保方里考



水經